



# 営農タイムリー!



## 発生予察情報について(9月)

2022年 8月30日発行

### 病害虫発生予報第7号(9月)

京都府病害虫防除所より、9月の予察情報が発表されました。

#### 病害虫発生予察第7号(9月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	穂いもち(中晩生) 紋枯病(中晩生) トビイロウンカ(中晩生) コブノメイガ(晩生) 斑点米カメムシ類(中晩生)	<u>やや多</u> (やや少) 並(やや少) 並(並) 並(並) <u>やや多</u>
ブドウ	べと病	やや少(やや少)
カキ	うどんこ病 炭疽病	並(少) 並(並)
果樹全般	カメムシ類	<u>多</u> (多)
果菜類	うどんこ病 疫病・褐色腐敗病 アザミウマ類 ハモグリバエ類	やや少(並) <u>やや多</u> ( <u>やや多</u> ) やや少(並) やや少(並)
キュウリ	褐斑病 炭疽病	<u>やや多</u> ( <u>やや多</u> ) <u>やや多</u> (並)
ネギ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	並( <u>やや多</u> ) 少(並) 並(並)
野菜全般	ハダニ類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並(やや少) <u>多</u> (多) 並(並)
アブラナ科野菜	コナガ	やや少(やや少)
ホウレンソウ	シロオビノメイガ	並

# イネ

## 1. いもち病（穂いもち：中晩生）

予報内容 発生量： **平年比 やや多い** （前年 やや少ない）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの主な伝染源となる。
- （2）穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- （3）発病に要する温度範囲は、14～30℃、適温は25℃である。
- （4）出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。
- （5）ヒノヒカリ、祝等、発病しやすい品種では注意する。

## 2. 紋枯病

予報内容 発生量： **平年並** （前年比 やや少ない）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）高温多湿で発病が助長され、病斑が上位へ進展すると被害が大きくなる。
- （2）昨年多発したほ場では、浅水管理に心掛け上位葉鞘への進展を抑える。
- （3）ほ場内をよく見回り、病斑が上位へ進展している株が多い場合は防除を行う。

## 3. トビロウカ（中晩生）

予報内容 発生量： **平年並** （前年並）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- （2）8～9月の気温が高いと増殖に好適である。
- （3）低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

#### 4. コブノメイガ（晩生）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉を筒状に綴って食害し被害痕が白く目立つが、収量・品質に影響がでるのは上位葉の被害が多い場合のみである。少し食害が目立つ程度であれば、収量・品質にはほとんど影響はない。
- （２）晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネには成虫が集中的に飛来するので注意する。

#### 5. 斑点米カメムシ類（中晩生）

予報内容 発生量：平年比 やや多い

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類及びイネカメムシによる被害が増加している。
- （２）薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除（共同、一斉）が有効である。また、粒剤では種類により使用時期が決まっているので、防除適期に施用する。
- （３）平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

# 果 樹

## 1. ブドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 やや少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は22～25℃である。気温が低下し、降雨が続くと、発生が多くなる。
- (2) 病原菌は落葉した被害葉の組織内に卵胞子を形成して越冬し、翌年の感染源となるため、集めて適切に処分する。

## 2. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 少ない)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15～25℃である。夏季の高温時には病勢が治まるが、9月に入って気温が低下すると、病原菌の活動が再び活発になる。
- (2) 秋季に発病した葉の裏側には、白い菌叢が見られる。9月下旬には、菌叢の中に黄色から橙紅色の粒点が現れ、やがて黒色の子のう殻が形成される。子のう殻は落葉とともに土中で越冬し、翌年の感染源となるため、集めて適切に処分する。

## 3. カキ 炭疽病

予報内容 発生量 : 平年並 (平年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 9～10月に雨が多いと、果実の被害が増える。
- (2) カキノヘタムシガ、ハマキムシなどの食害部から発病することが多いので害虫防除も徹底する。
- (3) 本病は、被害枝や被害芽のなかで菌糸の状態でも越冬する。

## 4. 果樹全般 カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (2) 収穫期に近い果樹は、他の病害虫防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
- (3) 合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避けること。

# 野菜

## 1. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (2) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。
- (3) トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (4) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。

## 2. 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染し、多湿条件下で発生が多い。特に、豪雨により冠水、滞水したほ場では発生に注意する。
- (2) ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (3) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。

## 3. キュウリ 褐斑病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **発病適温は25～30℃で、高温多湿条件下で多発**する。
- (2) 一度発生したほ場では、毎年発生することが多い。
- (3) 施設栽培では換気を十分に行い、かん水も過多にならないようにし、高温多湿に注意する。
- (4) 窒素質肥料の過多は耐病性を低下させ、一方、肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (5) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。
- (6) 被害葉上の胞子は乾燥状態では相当長く生存するので、被害葉は土中深く埋めるか焼却処分する。

#### 4. キュウリ 短疽病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年並)

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。
- (4) 降雨が続く場合は病勢の進展に注意し、雨の合間をみて防除するよう心掛ける。

#### 5. 野菜全般 ハダニ類 (チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや少ない)

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

#### 6. 野菜全般 アブラムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

##### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生がする。
- (3) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に注意する。

## 7. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

## 8. 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) トマトハモグリバエは、8月以降多発する傾向がある。
- (2) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8 mm 目合いの防虫ネットを張る。
- (3) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (4) 幼虫が葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は発生確認後速やかに行い、防除時期を逸しないようにする。
- (5) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

## 9. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus : IYSV) による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。

## 10. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比 少ない（前年並）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- （２）産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- （３）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- （４）1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

## 11. ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、**若齢期の防除を徹底**する。
- （２）被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- （３）本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

## 12. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比 やや少ない（前年比 やや少ない）

### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- （２）雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- （３）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。



### 13. ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量 : 平年並

#### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- ( 1 ) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、施設栽培や雨よけハウスでは多発しやすいので注意する。
- ( 2 ) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

### 14. 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

#### 発生生態及び防除上注意すべき事項

- ( 1 ) 1 枚の葉に数百個の卵を塊状に産みつけ、ふ化した幼虫は若齢期( 1 ~ 2 齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- ( 2 ) ダイズやサトイモなどハスモンヨトウの初発を確認しやすい作物で、白変葉の有無等発生状況の観察に努める。
- ( 3 ) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。